

言葉を駆使する喜びを感じる子どもの育成を目指して

森 下 幸 子

1 はじめに

子どもたちは学校生活で、様々な言葉を使って学びに向かっている。その中で、子どもたちが言葉のもつよさを実感し、自分の思いや考えを相手によりよい表現を用いて伝えることができる、つまり「言葉を駆使すること」ができるように働きかけていくことが国語科に求められる役割だと考える。本校、国語部では、平成31年度から「言葉を駆使する喜びを感じる子ども」を育成する子ども像として研究を重ねてきた。今回は、その研究内容の一部を紹介する。

2 子ども像について

第4学年、物語文「一つの花」の学習で、心に残った言葉を本の帯を使って表現する単元を行った。子どもは、文章中の「一つ」と「一つだけ」の違いを考え、言葉の意味や働きを理解した。そして、心に残った言葉を選び、次のような本の帯を作った。

『一つだけのお花、大事にするんだよ。』

この言葉には、ゆみ子に、一つだけの命を大事にして、幸せに暮らしてほしいという、お父さんの特別な願いがこめられています。

その後、帯を紹介し合う中で、友達から「お父さんのゆみ子を大切に思う気持ちがよく分かる言葉だね。」「『一つだけ』という言葉に気を付けて読むと、お父さんがゆみ子を大事に思う気持ちがよく分かるね。」という意見をもらい、自分が相手に伝えたい事柄を理解してもらえたという達成感を味わうことができた。

言葉は、目の前の事物を区別したり新たな知を生み出したりする道具であるとともに、思いや考えを伝え合うための大切な手段の一つである。

人は、この言葉を駆使して、自分の考えを形成し、他者と言葉を通じて理解し合うことに喜びを感じてきた。つまり、言葉を駆使して他者と協働することで、豊かな文化を築いてきたと言える。

このように考えたとき、子どもが、言葉を駆使して、自分の思いや考えを相手によりよい表現を用いて伝えることが、未来を創ることにつながっていくと考える。したがって、子どもが言葉のもつよさを実感し、言葉を駆使することができるように働き掛けていくことが、国語科に求められる役割だと考える。

そこで、本校国語科では、「言葉を駆使する喜びを感じる子どもの育成」を目指すこととする。

(2)

3 学習像について

子どもが、言葉を駆使する喜びを感じるためには、目的に応じて、言葉に着目して文章を読み解いたり、自分の思いや考えを適切に表現したりすることが必要である。さらに、他者と思いや考えを共有する経験を積み重ねることで、自分の言葉が相手に伝わることを実感し、進んで言葉に関わり、よりよい表現を求めようになると考える。

そこで、本校国語科学習では、学習過程において次のことを大切にしている。

子どもが、言語活動を通して言葉にこだわること。

「言語活動を通して言葉にこだわる」とは、言葉による見方・考え方を働かせながら、理解したり表現したりすることである。子どもが、国語科の学習において、言葉にこだわるためには、相手や目的を明確にした言語活動を設定することが必要である。その際、教師が、相手や目的を示すことで、子どもが、視点を明確にもって言葉の意味や働き、使い方等について問い直したり、表現を工夫したりすることができるようにしている。

さらに、文章から言語活動に必要な情報を取り出したり、言語活動につながる表現を見付けたりして、子どもが言葉を意図的に使い、他者と思いや考えを共有することができるようにしている。

このように、言語活動を通して、言葉にこだわりながら、他者の文章を理解したり、自分の思いや考えに合う言葉で表現したりする学習を繰り返すことで、子どもの言葉への意識を高め、言葉を駆使する喜びを感じる子どもを育成することができるようにしている。

そこで、本校国語科では、言語活動を通して言葉にこだわる国語科学習を設定し、研究を重ねてきた。

4 研究内容

(1) 言語活動を通して言葉にこだわる国語科学習

言語活動を通して言葉にこだわる国語科学習とは、「言語活動を通して、言葉にこだわりながら他者の文章を理解したり、自分の思いや考えに合う言葉で表現したりする学習」のことである。

(2) 学習過程

言語活動を通して言葉にこだわる国語科学習を展開するために、次のような単元の学習過程を組織する。(表1)

表1 言語活動を通して言葉にこだわる国語科学習の学習過程

過程	○学習活動 □教師の手立て
出会う	<ul style="list-style-type: none"> ○学習課題と学習計画を立てる。 □目的を明確にした言語活動の設定 □試しの言語活動の場の設定
味わう	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">問いを見いだす場</div> <ul style="list-style-type: none"> ○問いをもつ。 □言語活動につながる問いを見いだす教材の提示 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">言葉を吟味する場</div> <ul style="list-style-type: none"> ○言葉について考える。 □言葉に着目する問い <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">言葉を自覚する場</div> <ul style="list-style-type: none"> ○学習内容をまとめる。 □言葉や表現を問い直す □指導事項を具体化する
磨く	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">言葉を磨く場</div> <ul style="list-style-type: none"> ○教材文で言語活動に取り組む。 □教材文を基にした言語活動のモデルの提示
生かす	<ul style="list-style-type: none"> ○本番の言語活動に取り組む。
振り返る	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">言葉を評価する場</div> <ul style="list-style-type: none"> ○学習内容を振り返る。 □相互評価の場の設定 □評価の視点の提示

このように、「出会う」過程では、目的を明確にした言語活動を設定し、子どもの問いや願いを見いだして学習課題を設定する。そして、「味わう」過程と「磨く」過程で言語活動に応じた読む力を高め、「生かす」過程で言語活動に取り組む。最後に、「振り返る」過程で相互評価を行って、自己の表現の高まりを実感できるようにする。

(4)

5 主な手立て

言語活動を通して言葉にこだわる国語科学習を充実させるために、目的を明確にした言語活動を設定し、単元の学習過程において次の五つの場を設ける。

学習過程	学習の場
味わう	問いを見いだす場 言葉を吟味する場 言葉を自覚する場
磨く	言葉を磨く場
振り返る	言葉を評価する場

(1) 目的を明確にした言語活動の設定

○目的を明確にした言語活動とは

「目的を明確にした言語活動」とは、子どもの問いや願いを基に設定した言語活動のことである。子どもが言葉にこだわって読解したり表現したりするためには、教材文を何のために読むのか何のために表現するのかを明らかにしなければならない。

そのために、教師は、指導事項と子どもの問いや願いを関連させた言語活動を設定する。

○試しの言語活動を行うように仕組む。

教師は、言語活動を設定する時に、単元の指導事項を基に、単元の学習を通して子どもが何ができるようになるのか、何が課題かを具体的に想定する。その際、子どもの学習や行事等、生活実態に沿った必要感のある言語活動を設定する。

次に、出会う過程では、必要感のある言語活動を提示し、子どもの「取り組みたい」という願いを引き出す。そして、試しにその言語活動を行うよう促すことで、「書き手が伝えたいことを正確に読み取るためには、どのような読み方をするといいのだろう。」「相手に伝わるように書くにはどのような書き方をするといいのだろう。」といった問いをもつことができるようにする。

最後に、子どもの問いや願いから、相手と目的を明確に表した学習課題とその課題を解決するために必要な学習計画を、子どもたちと設定する。

(2) 問いを見いだす場

○問いを見いだす場とは

「問いを見いだす場」とは、子どもが言語活動に関する課題に気付く場のことである。授業の導入時には、子どもが言語活動を達成するために何が分かるかよいか、教材文を読む

目的をはっきりさせることが必要である。そこで、教師は、子どもが言語活動につながる問いを見いだすことができる教材を提示する。

○問いを見いだす教材の提示

子どもが問いを見いだすために、指導事項と言語活動の関わりを基に作成した教材を提示する。そして、他者との思考のずれから言語活動につながる問いを見だし、その問いを授業の目当てとして全員で共有できるようにする。(表2)

表2 問いを見いだす教材(例)

<p>【第4学年】物語文「一つの花」 (学習課題) 自分のおすすめの本を紹介するために「一つの花」で名文を選び出す読み方を学習し本の帯を作ろう。</p>	
指導事項	<p>文章を読んで理解したことに基づいて感想や考えをもつこと。 【読むことオ】</p>
教材	<p>①「じゃあね一つだけよ。」 ②「なんてかわいそうな子でしょうね。」 ③「みんな食べちゃったんですの。」</p> <hr/> <p>この言葉は、お母さんが自分の分の食べ物をゆみ子に分け与える優しさが表れた言葉です。</p> <hr/> <p>①～③の選択肢の中から名文の説明に合う言葉を叙述を基に読み取る。</p>

(3) 言葉を吟味する場

○言葉を吟味する場とは

「言葉を吟味する場」とは、子どもが言葉による見方や考え方を働かせる場のことである。子どもが言葉への意識を高めるためには、言葉の意味や働き、使い方等について自分の考えをもち、他者と対話することによって言葉や表現への理解を深めることが必要である。そこで、教師は、言葉を吟味するための発問を子どもに投げ掛ける。

○言葉に着目する問い

「言葉に着目する問い」とは、他者が意図的に使った言葉に着目し、思考できるようにするための問いのことである。

【言葉の意味や働きを明らかにする問い】

→言葉の意味や働きの違いを問う。

→人物による言葉の捉え方の違いを問う。

(6)

【表現の効果の働きを明らかにする問い】

→読み手から書き手の立場に変わるよう促すために問う。

教師は、子どもが言葉による見方・考え方を働かせ言葉の意味や働きに着目して話し合うことを促すために、教材文から複数の考えが認められたり複数の考えに分かれたりする言葉や表現を見付け出し、本時の指導事項との関連を図りながら発問を作り出す。

例えば、第4学年「一つの花」の学習では、教師が言葉を吟味する場において、子どもに次のような問いを投げかけることが考えられる。

【言葉の意味や働きを明らかにする問い】

○「一つ」と「一つだけ」の言葉の意味や働きの違いを問う。

○お母さんの優しさが分かる言葉を問う。

【表現の効果の働きを明らかにする問い】

○お母さんの「一つだけ」とゆみ子の「一つだけ」の意味の違いを問う。

○作者は、なぜお父さんが戦争へ行ってから十年後のゆみ子とお母さんの暮らしを描いたのかを問う。

(4) 言葉を自覚する場

○言葉を自覚する場とは

「言葉を自覚する場」とは、子どもが教材文を用いて理解したことを他の文章に転移できるように一般化してまとめる場のことである。子どもが、本時の学習を通して何が分かったのか何を学んだのかを自覚するためには、子ども一人一人が自分の思考を書き表す必要がある。そこで教師は言葉や表現のよさを再度問い直す。

○言葉や表現を問い直す。

教師は、子どもが教材文を用いて理解したことが、言語活動に本当に転移できるかどうかを確かめるために、本時で取り上げた言葉や表現が言語活動に必要なかどうか問い直す。すると、子どもは、言語活動に必要なポイントであるか思考判断し、本時で学習した事柄を基にポイントとしてまとめることができると考える。

○指導事項を具体化する。

教師は、子どもがポイントを書き表すために単元で身に付ける指導事項を具体的な姿で表現しておくことが必要である。また、子どもが書き表したポイントを自分の言語活動に活用することができるように、教材文の中で転移する場を設け、ポイントの一般化を図る必要がある。

そのために、授業の導入時に必要感のある目当てを立て、まともに向けて意図的に子ども

と目的を共有する布石を打つことが大事である。必要のある場・目的・意味を子どもが実感し、学習した内容をまとめることができるようにする。

(5) 言葉を磨く場

○言葉を磨く場とは

「言葉を磨く場」とは、子どもが教材文を読んで学習した言語活動のポイントを活用し教材文を基にした言語活動に取り組む場のことである。そこで、教師は、教材文から読み取ったことを基に作成したモデル文を提示する。

○教材文を基にした言語活動のモデルの提示

モデルとは、子どもが自分の思いや考えを表現するための表現方法を理解できるようにするための教材のことである。子どもは、モデルを基に教材文で獲得したポイントを生かして言語活動に取り組むことができると考える。

例えば、第4学年「一つの花」では、教師がモデルの一部を隠した教材を提示した。そして、「一つ」と「一つだけ」のどちらの言葉がモデルの考えに合う言葉であるかを考えた。

【教師のモデル】

『一つだけ』の花』

お父さんが、ゆみ子の将来を心配して戦争に行く前にわたしたコスモスを表した言葉です。この言葉には、ゆみ子に戦争中のまずしい暮らしを乗り越えて、たった一つの命を大切に生きてほしいという、お父さんの願いがこめられています。ぜひ読んでください。

このように、教師がモデルを提示することで、子どもがどのようにして自分の思いや考えを表現するとよいのかを理解し、教材文を基に理解したポイントが言語活動に活用できるという実感を味わうことができるようにする。

(6) 言葉を評価する場の設定

○言葉を評価する場とは

「言葉を評価する場」とは、子どもが単元末の言語活動を相互評価する場である。子どもが、ポイントを活用して自分の言語活動に取り組む際には、相手を意識し伝わりやすい言葉や表現方法になっているか確認することが大切である。なぜなら、相互評価をすることで他者に自分の思いや考えが伝わった実感が言葉を駆使する喜びにつながるからである。そのために、教師は、ポイントを基に評価の視点を提示する。

○評価の視点の提示

教師が、学習課題に対して、子どもが単元末で自分が何ができるようになったのかを明ら

(8)

かにする視点を提示することで、言葉を駆使する喜びを感じることができると考える。相互評価の観点は、単元導入時の教師のモデルと試しの言語活動を比較することで、単元末に自分の表現がどのように変化するとよいのかを具体的に表すことができるようにする。

以上のように、学習過程に沿って五つの学習の場を設定し、手立てを講じることで、言葉を駆使する喜びを感じ子どもを育成することを目指している。

<主な引用・参考文献>

- ・文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 国語編』 東洋館出版社 2018
- ・奈須正裕『「資質・能力」と学びのメカニズム』 東洋館出版社 2017
- ・三宮真智子『メタ認知で〈学ぶ力〉を高める』 北大路書房 2018
- ・「読み」の授業研究会『国語の授業で「主体的・対話的で深い学び」をどう実現するか』 学文社 2017
- ・「読み」の授業研究会『国語の授業で「深い学び」をどう実現していくか』 学文社 2018
- ・全国国語授業研究会・筑波大学附属小学校国語研究部『国語授業における「深い学び」を考える』 東洋館出版社 2017

(長崎大学教育学部附属小学校国語部 もりした さちこ)